

資料館の小部屋

その2

現在、歴史民俗資料館は収蔵庫の空調設備改修工事のため、休館中です。展示をご覧いただけません。先月から学芸員おすすめの所蔵品を紹介しています。第2回は、昔の生活道具「民具」のお話です。

「民具」ってどんなもの？

民具というのは、基本的には人間が生活するための必要性から作りだした道具、つまり「日用品」とほぼ同じ意味の言葉だとされています。

機械による大量生産品は含まないというのが一般的ですが、近年はそういったものも「新民具」として研究の対象とすべきだという意見もありますので、ここの「民具」の定義は、「新民具」も含めて広くとっておくことにします。

民具を見ると何が分かる？

民具を専門に扱う学問は、言い伝えや聞き取りから人びとの暮らしを研究する「民俗学」の一部で、「民具学」と呼ばれています。いろいろな道具のことを調べること、その道具がどういふふうに使

われていたのかや、当時の人びとの生活の様子が分かります。

歴史学が文字で書かれた資料から過去の出来事を知るのに対し、民具学は実際に使われた道具に残された痕跡から、過去の暮らしを知ります。「もの」から歴史や文化を見るところでは、歴史学よりも考古学に近いのかもしれませんが、なお、資料館にある民具は、池田で暮らす人びとが、昔使っていたものを寄贈してくださったものです。

記憶に残る民具

― 足踏み式ミシン ―

さて、ここからは資料館にある、懐かしい民具をひとつ紹介します。それは1960年代には嫁入り道具としても定番だった「足踏み式ミシン」です。

ミシンが日本で普及しはじめたのは、明治時代です。その頃は、右手でハンドルを回しながら縫う「手回し式ミシン」が使われていました。しかしこれでは、常に右手がふさがってしまうため、布送りを手で片手ではなくてはなりません。その点、足踏み式なら両手を使えるので、安定して布を送ることができます。

ミシンの普及は洋服の普及と深く関係しています。初期の頃のミシンは、外国からの輸入品しかありませんでしたが、洋服を着る人が増えてきた大正時代にな

◀富士精密工業(現THKリズム株式会社)製・リズムミシン



にバック縫いができたりすることなど、メリットも多くあり、今でも足踏み式を好んで使うという人もいます。また、電気の供給が不安定な発展途上国などに、NGOなどを通じて輸出されています。丈夫で故障の少ない日本製の足踏み式ミシンは、遠く海外でも今も活躍しているのです。

資料館にはさまざまなタイプのミシンがありますが、今でもきちんと動くものが何台かあります。そのうちの一台の足踏み式ミシンが毎年、冬の企画展「ちよつと昔のくらしの道具」で展示されていて、実際にさわって動かすことができます。

新型コロナウイルスの影響でマスクが品薄になったとき、そのミシンを使って布製マスクを縫ってみました。今のミシンのように複雑な模様などは縫えませんが、直線縫いだけなら、今のミシンと変わらない縫い上がりでした。

足踏み式ミシンは、次の「ちよつと昔のくらしの道具」展でも展示される予定です。興味のある方はぜひ、見に来てください。(新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、今年度の展示では資料にさわれない可能性があります。ご了承ください。)

それでは、次回をお楽しみに。

◆問い合わせは歴史民俗資料館

☎7511-3019